京都（↓Web）「ヲシテ講習会」　112回目　令和7年4月19日（2025）　池田 満

わが国の再建は、ヲシテを以ってするしかないのです。

59年前、昭和41年（1966）に松本善之助先生によって発見された『ホツマツタヱ』は、まったく現代の奇跡でした。　記紀の原書だと解って来てからも、それからが大変です。普及活動は難航します。「直訳偽書の秀真伝（しゅうしんでん）族」の輩がハタレのように湧き満ちてくるのでした。

アマテルカミもハタレの平定には、おこころをさぞお痛めになられたことでしょう。

奇跡は続きます。昭和48年（1973）には『ミカサフミ』も発見されました。平成24年（2012）には『アワウタのアヤ』も発見されました。総合名、ヲシテ文献と命名しました。

直訳退治は大変です。応神天皇のころに王仁が伝えたとしても、すでに1500年来の漢字暴露が長かったのでした。この間にどっぷりと漢字でモノを考える習慣が身に付いたのでした。漢字はとっても便利です。でも、所詮は外国語。

わが「縄文文明」は大きいのです。　国祖クニトコタチの建国は、「トのヲシヱ」を憲法としての、立憲君主国家の政治形態だったのです。

「トのヲシヱ」を表すのには、やまとことばオンリーです。漢字ではうまく表せません。ヲシテの創造の過程を説明するのにも、漢字ではうまくゆきません。

これ程の文明国が、世界広しと言えども他に有り得たのでしょうか？

建国以来大きな波が幾度もやって来ました。何とか乗り越えて来ました。これからも大きな波はやってまいります。それをうまく乗りこなしてゆくために、ヲシテによる国家再建が必要です。　単にわが国だけのためでもないのです。

ホ3、　ヒヒメ・ミヲうむトノ の アヤ

『ミカサフミ』の、3アヤめ末に、5・7調で7行の付加説明文が記述されています。

ツワモノガ ハシラニクラブ
ユエトエハ ヲキナコタエテ
タマハタテ ヌキハウルホス
ホコモタテ ヨコマホロボス
ミ3-24
フタハシラ ユキキトリ ヤノ
フタカミト キキテオノオノ
ヨシテツメケリ

「ツワモノ」はツワモノヌシでしょうね。そうすると、ヲキナとはカナサキさんでありましょうか？

質問者が、ツワモノヌシでして、教えを講義するのがカナサキさんだとしますと、カナサキの任地が、ツクシ（九州）へと国替えになる（ホ8-91）前の事であると考えられます。おそらくは、ハタレの騒乱の起きる前で、つまり、イサワにミヤコが営まれる以前の事でありましょう。もっと早くのハラミノミヤのアマテルカミご即位の前かも知れません。カナサキさんは、壮年期を少し越えるかどうかの時期で、ツワモノヌシは青年期から壮年期に至るころと推考するとよいでしょう。

カンヨヂゾ ヤチチガヌナム
タマカエシ コヽストノネオ
ムスブフミ コヽストムスビノ
ホ8-95
ナニスヌテ カスガトノトゾ
タフトマセ キミカナサキニ

質問者ツワモノヌシから『ミカサフミ』の編集者にこの文章が受け継がれた経路は、つまりそれはココトムスヒさんであろうか、再伝授のアマノコヤネさんであるか、という事になりま

す。ココトムスヒは文章力にも長けていて「タマガエシ　ココストノネをむすぶフミ」（8-94）を編著したのでした。それで、本名のヰチチは、ココトムスヒの讃え名が下賜されたのです。ツワモノヌシは、ココトムスヒの父です。カンヲチと言われて尊ばれます。

・　　・

モロカミ（諸臣）がタカマ（宮中）にマツリコト（政治）に集まって諮(はか)っての後のことでした。

諸臣の集まるタカマ（宮中）の場所は勉強の場でもありまして、この時は、ツワモノヌシが歴史についての質問をしました。

『フタカミ（イサナギ、イサナミ）のヒ・ヒメとミ・ヲ（一女、三男）を儲けになられたトノ（建物）の場所が五カ所だと聞きました。お四方(よんかた)なのにどうして五カ所の産屋になるのでしょうか?』

此の問には、カナサキさんが答えました。

・

昔の事です。フタカミは最初ツクハ（筑波山の中腹、筑波山神社のところイサカワ（今の男女川(みな)）の源流）において新婚生活を始められました。柱の周りを巡られて問われました。

「メカミには成りなり足らぬメモトあり」

「ヲカミの成りて余るモノ、合わせてミコを産まん」

として、ミトのマクハイを為してコ（子）を孕(はら)まれました。産まれたのは女の子でした。名はヒルコと名付けられました。（後のワカヒメ、シタテルヒメさんです）

ところが、チチ（父）のイサナギさんは４０歳で、ハハ（母）のイサナミさんは３１

歳でした。（『ミカサフミ』**1**-13(10892)には、42歳と33歳の記載あり）

イサナギさまもイサナミさまも共にアメのフシ（後の厄年に匹敵）に当たっていました。

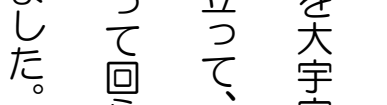
アメのフシに遭遇しますと、孕み子は、チチのヲヱ（身体の病）にあたり、あるいはハハのクマ（心の病）に当たるとされています。つまり、身体の変調期にあたって病（やまい）を得やすくなっているのです。そこで、伝統の通りに捨て子にして、他の人に育ててもらうことになりました。拾い子です。3歳に満たない幼気(いたいけ)な時に、イワクスフネ（祝い飾った舟）に乗せて捨て子にしました。カナサキのヲキナが拾い子としてヒロタの場所（広田神社、兵庫県西宮市大社町）とニシノミヤ（西宮神社、兵庫県西宮市社家町、中世は浜の南の社と呼ばれる。今に十日エビス）にヒルコヒメを育てます。

父母のフタハシラ（イサナギ、イサナミ）は、皇位を受け継ぐウキハシ（大いなる役目の仲たちの人）を得る事になります。オノコロ（自然な収まり所）の成り行きでした。当時は、6代アマカミのオモタルさんとカシコネさんの間にお世継ぎが産まれませんでした。さらに、気候変化で農作物の不作が続き世の中の秩序に混乱が生じて「ワイタメアラズ（分別・区別なし）」の事態になっていました。

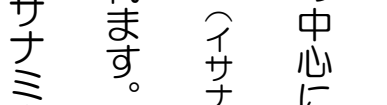
オモタルさんはオノ（木を切る道具）で罪人を斬って世の秩序の維持に努められましたが、良い世の中に改善するまでには至りませんでした。そこで、イサナギとイサナミに7代目の皇位が譲られることに成りました。

皇位継承の儀式はヤヒロトノ【間口8間の大きな建物か？　詳細は未詳。日吉大社の裏手の山は比叡山の枝嶺の八王子山。金大巌（こがねのおおいわ）や三宮神社・牛尾神社もある】にておこなわれます。イサナギさん、イサナミさんのフタハシラは世の中に秩序を齎してオノコロ（自ずからに安定する）を為しゆくために皇位を継承なさってのご即位を挙行なさいました。

ミヤのナカハシラを大宇宙の中心に見立てて巡りてコトアケ（宣言）をしようと決められます。北側に立って、メ（イサナミさん）はヒタリ（左）から、ヲ（イサナギさん）はミキ（右）に別れて巡って回られます。お二人が出会われました南側にてコトアケ（宣言、言挙げ）をなさいました。イサナミさんはおっしゃいます。

「アナニエヤ　ヱヲトコ　  」と。

またイサナギさんも受けて応えられます。

「ワナウレシ　ヱオトメ　  」と。

フタカミは歌いあいました。後にイサナミさんは孕まれますが、ヱナ（胞衣）は破れて月満ちるまでに至らず流産になってしまいました。このヒヨルコはアハ（泡）となって、コ（子）の数には数えられません。アシフネに乗せてアハチ（淡路島）にて流すのでした。アメ（先代の6代目オモタルさん）に報告しました所、オモタルさんは「フトマニ」にウラナイをして下さいました。そして、因果関係を教えられます。

『ヰ・ヨ（5・4）のウタの音韻数の不適切さによって、コト（結果）が結ばれなかったのでしょう。

みつるナビ
㊂　『フトマニ』の5・4の項目はモ・チリです。

5・7の項目はモ・エテです。

「アイフヘモヲスシ」（「アワウタ」の5・7の各頭韻。幽の48の代表）の8要素と

「ヤマ、ハラ、キニ、チリ、ヌウ、ムク、エテ、ネセ、コケ、オレ、ヨロ、ソノ、ユン、ツル、ヰサ、ナワ」の16要素（「アワウタ」から「トホカミヱヒタメ」と「アイフヘモヲスシ」を除いた残り。顕の代表）の32音韻から導き出

します。

大宇宙の構成は、幽と顕との結びつきで構成されていると考えられています。

幽は４８で表わす事が出来ます。

顕は４８で表わす事が出来ます。

幽と顕、合わせて９６アヤが備わってヒトが産まれてくる。と言うわけです。

旧暦６月（現７月）乾き

フツキ旧暦７月フミツキ

ハツキ旧暦８月

ナカツキ旧暦９月

コヱのヨソヤヂは、声の４８、「アワウタ」のこと。

５・４（５×８＋４＝４４）

５・７（５×８＋７＝４６）

また、コトアケ（宣誓・宣言）も女性から始めたのは、これも、良くなかったようです。

トリのトツキ（嫁ぎ）の例を見てみましょう。庭先で尾羽根をパタパタさせているニハナフリ（鶺鴒）がいます。

メのニハナフリが、パタパタさせて誘って鳴いても、この時はヲは鳴き去ります。またある日に、ヲトリが装い誘います。これをメが知って、あひ（会い）交わります。ニハナフリのトツキ（嫁ぎ）のやり方こそ、アメ（天然自然）からの告げの教えです』

そこで、フタカミはもう一度、ヤヒロトノ（間口8間の大きな建物？）に戻ってナカハシラを巡り直します。今度は季節の巡りに合わせた方角に、それぞれに巡られます。北に立たれたフタカミは、ヲのイサナギさんがヒタリ（左）のヒカシ（東）の方向へ、メのイサナミさんはミキ（右）のニシ（西）の方向へ、巡り会うミナミ（南）の所で歌います。アメのアワウタです。

イサナギさんは、

『アナニヱヤ　ウマシオトメニ　アイヌ

』

イサナミさんが答えて、

『ワナニヤシ　ウマシヲトコニ　アヒキ

』

みつるナビ

㊂　15音と15音の続き歌です。これを「ツキウタ」と呼ぶのでした。非常に意味深く意趣の重なり合されたウタです。月の巡り（約30日）、物質化してゆく過程（幽に顕の物質が付くの意味。顕微鏡の発明はオランダで1590年頃）、文章構文の構成力（ナカレキとオヨクキ）、フネが作られてきた歴史（イカダとカモ）。『ワカウタのアヤ』の発見によってわかった事です。別名「ツクハウタ」とも呼ばれます。アマテルカミの時代に「ツツウタ」にも、さらには漢字時代になって連歌にも発展します。連歌の「菟玖波集」（南北朝期の連歌撰集。20巻。二条良基，救済（ぐさい）

撰。1356年の序）」や「筑波問答」（二条良基）は「ツクハウタ」の伝統から命名されたものです。ヲシテ時代の「ツツウタ」の詠み本が発見されるのを、首を長くして待っています。ツツウタは**39**アヤ68～80に詳しく説明されています。

そうして、7代のアマカミのイサナギ・イサナミさんはご即位の後に、全国各地を巡行なさいます。国家の建て直しです。

ヤマト（東海道諸国）のアキツス（明らかに治まり）。アハチシマ（淡路島）にも至ります。イヨとアハのフタナのクニ（四国）。オキ（隠岐）のミツコ（三つ子）の島にも及びます。サト（佐渡）にもウシマ（大島。伊豆か?）にも、立て直しは及びます。豊かになってゆく海川や山の幸でした。キヲヤククノチ　カヤノヒメ　ノツチモナリテ【地力を増して農業生産に資する技術のことか?　詳細は未詳】。アワウタ（48音の5・7調4行のウタ）を教えて国語力を高めて全国を巡られたフタカミは、富士山南麓のハラミのミヤにてタシテ（治めて）おられました。（タスの言葉は、「トのヲシヤ」の関連語として考えましょう）

さて、トのクニサツチの由緒の深い富士山南麓のハラミにておわしますと、国家の再建への道のりはほぼ軌道に乗ったことを実感なさいました。さて、次のテーマはお世継ぎのミコの誕生が待たれることです。イサナギさんはおっしゃいます。

『既にヤシマ（全国）の再建は成ってきたのです。イカンソ（如何にか!）キミ（お世継ぎのミコ）をウマン（儲けよう）』と強く念願なさいました。

ハラミヤマ（富士山）に登られたイサナギさんは、マスカガミ（周囲がヒトの平均身長）の大きなカガミ（鏡）に照らして誓いを立てられました。富士山の山頂のコノシロイケの水でタ（左）の目を洗ってヒル（日）に祈り、カ（右）の目を洗ってツキ（月）に祈りました。そうして産まれたミコはヒのミコ、ヒのカミと名付けられます。

ミナ（当面のお名前）をウホヒルギと讃えてお呼びするのでした。イサナギさんの姉（妹かも?）のココリヒメ（キクキリヒメ）が、ミコの声から聞き取ったというミナ（御名）

でした。全国の津々浦々にまでも、ヒのミコに寄せる期待は高まりました。

そこで、勉学のためヒタカミのトヨケカミの許へ留学をなさいます。アメのギ（天下を治めるべき皇太子）としての教育です。ミハシラノミチ（「アメのミチ」）を奉ります。ヒのミコ（後のアマテルカミ）のご誕生祈願のハラミ（富士山）を、オオヒヤマと呼ぶようになりました。トヨケカミはヒのミコのイミナ（マコトナ、実名）をワカヒトと命名なさいました。

フタカミは次いでツクシ（九州）に赴かれます。ツクシにて産まれたミコをツキヨミのカミと名付けられます。ハラミ（富士山）の山頂でのミソギ（禊ぎ）の事が所以（ゆえん）になってます。富士山の山頂のコノシロイケの水でタ（左）の目を洗ってヒル（日）に祈り、カ（右）の目を洗ってツキ（月）に祈られた事でした。東のハラミ（富士山）にてはウホヒルギ（後のアマテルカミ）さんのご誕生があり、ニシ（西）のツキスミ（九州）にてはツキヨミさんです。ちなみに、現在地の考証としましては、ハラミは富士山南麓の浅間大社（元のおミヤの位置はもっと山のほうだとも言われています。富士宮市）、ツキスミは江田神社（宮崎市阿波岐原町産母（やぼ））が候補地として有力です。共に『延喜式』に記載がされていますので千年の歴史は確認できます。ツキヨミさんもヒのミコ（後のアマテルカミ）に続けと、ヒタカミのトヨケカミの許に勉学に赴かせました。

さて、先年にアメのフシ（今の厄年）に当たったのでヲヱ・クマ（身体の病・心の病）除けのために捨て子にしたヒルコヒメが成長してきました。ヒルコヒメは元のイサナギさんイサナミさんの許に戻ってきます。そこで、アマテルカミの妹として兄妹に復しました。ソサ（和歌山から熊野地方にかけて）に至って、フタカミはミコを儲けます。ソサノヲ（後の別名にスサノヲ、産田（うぶた）神社、熊野市有馬町）は生まれながらに、母のイサナ

ミさんにケカレ【ケ（ちから）の枯れ、穢れ、ヲノコはハハのクマとなる、詳細は未詳】があったため素直な子に育ちませんでした。ソサノヲは、常にオタケヒ（騒ぎ立てて）ナキ・イサチ（泣き喚いて）クニタミ（一般国民）に迷惑ばかりかけます。このソサノヲの齎す災いは、イサナミさんのご自身の身から出た錆だと、我が身に受けて償おうとなさいました。また、タミの人々のヲヱ・クマも我が身に受けて守ろうと、クマノ・ミヤをお建てになりました。現在では熊野本宮大社（熊野坐神社、和歌山県田辺市本宮町本宮）と記載されていますが、クマノの言葉の本意はヲヱ・クマ（身体の病・こころの病）からきていました。イサナミさんがタミのヲヱ・クマ（身体の病・こころの病）をも守ろうと念願なさっての命名です。

・

こうして、みこころを、お尽くしになられてヒ・ヒメとミ・ヲ（一女三男）をそのカミ（昔）に儲けになりました。キミ・トミのミチを定めて、「トのヲシテ」をはっきりと再び通してゆかれました。また、時代の要請により「トのヲシテ」を乱して逆らう者をホコ（後のツルギ）によって滅ぼす制度も導入なさいました。社会の秩序維持を目的とした制度です。

イサナギさんイサナミさんのフタハシラのミコやヒメミコ（皇子、皇女）を儲けられましたウミトノ（お産みのトノ）は5個所でして、アマテルカミのアマノハラミ（富士山南麓）と、ワカヒメさんのツクハヤマ（筑波山神社のところ）、流産のアハチ（伊弉諾神宮、兵庫県淡路市多賀。イサナギさまがのちに崩御されますところ）と、ツキヨミさんのツキスミ（九州、江田神社、宮崎市阿波岐原町字産母（やぼ））、それとソサノヲのクマノ（産田（うぶた）神社、熊野市有馬町、および、熊野本宮大社、和歌山県田辺市本宮町本宮）でした。